

## 「アフリカで、バッグの会社はじめました」

著者：江口 絵里

出版：さ・え・ら書房

発行：2023年6月30日



私が勤務する京都すばる高校には「グローバルビジネス」という商業科目（学校設定科目）があり、開発途上国のソーシャルビジネスを主に取り扱っている。その授業内で、アフリカで起業した日本人や、そのビジネスプランを紹介したいと思い、本書を手にとった。

主人公である仲本千津さんは、アフリカのウガンダで伝統的に使われている布や柄を使ったバッグを製造し、日本で販売する「RICCI EVERYDAY (リッチー エブリデイ)」の創業者である。仲本さんは幼いころの悲しい体験から、「人の命を救いたい」という思いを持つようになった。医者になって病気を治す、国連職員になって戦争をなくす…そんな数々の夢を経て、仲本さんが選んだのは「社会起業家」だった。本書は単にある女性の進路実現ドキュメンタリーではなく、ビジネスで人の命を救うことは本当にできるのか、という大きなテーマについても私たちに考えさせる一冊となっている。

内容は11の章に分かれている。

- 第1章 社会起業家、仲本千津
- 第2章 「私、国連で働く！」
- 第3章 銀行からアフリカ支援NGOへ
- 第4章 起業
- 第5章 おかあちゃん 百貨店飛び込み営業事件
- 第6章 原石が宝石に変わるとき
- 第7章 罪深きファッション業界
- 第8章 ウガンダのためにも、日本のためにも
- 第9章 救えなかった命
- 第10章 夢見る力
- 第11章 平和をつくるバッグ

第1章から3章までと9章が起業までの生い立ち、4章から8章までが起業後の日々である。本書は仲本さん自身によって書かれたのではなく、作者(江口氏)が仲本さんにインタビューしたりビジネスの現場を見たりして、それをまとめたものである。そのためある種の「自分語りの熱量」には欠けるのかもしれないが、客観的で明るく、テンポのよい文体で進んでいき、中高生にも読みやすい。実際に江口氏も、「自分の将来のことを考えはじめる年ごろの女の子を、千津さんがそっと後押ししてくれるような本」を作りたかったと書いている。また、仲本さん自身のことだけでなく、ウガンダの社会問題やファッション業界が抱える構造的課題、コロナ禍での経営危機など、内情をしっかりと伝えながらも、過度に悲観的・専門的にならず、平易な表現となっているのも特色といえる。

私は、仲本さんの素晴らしいところは、①したいことができれば、大きな声で周囲に言う ②自分の弱み(できないこと・苦手なこと)を隠さない ③「失敗は存在しない」と考える、という3点だと思う。①や②によって、周囲が思わぬ情報や人脈をもたらしてくれたり、手を貸してくれたりする。③については、仲本さんが「次に何かをするときに生かせればそれは失敗とは言わない」と話している。これは、何かを決断するときの「相談はするが、最後は自分で決める」という行動とセットではないか。そうでなければ、「誰々の言う通りにしたのにうまくいかなかった。失敗だ」となる。

これら3点は起業家にとってとても大切に、なかでも③は大小様々な決断を日々迫られる経営者には不可欠な思考であろう。同時に、目の前にいる生徒たちに伝えたい考え方でもある。

読後、本書が今年度の「青少年読書感想文全国コンクール」の課題図書として選定されていることを知った。次々に仕事を変え、起業した仲本さんの生き方を、生徒たちは驚きをもって読むかもしれない。何しろ一部の大人が言いがちな「大企業に入って、定年まで勤めて…」とは真逆の生き方である。しかし、実は仲本さんの「人の命を救いたい」という思いは全くぶれていない。その軸さえあれば、仕事は変わっていい。すべての「変わる経験」は未来につながる。そう信じる大人から、そう信じてほしい子どもたちへ贈る一冊である。

起業教育研究会 企画委員  
京都府立京都すばる高等学校  
企画科 小川 建治